

## 階層制社会とその経済的基盤： カムチャツカの事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヴィクトル A., シュニレルマン メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001987">https://doi.org/10.15021/00001987</a>

## 階層制社会とその経済的基盤

カムチャツカの事例から

ヴィクトル A. シュニレルマン

ロシア科学アカデミー人類学民族学研究所

国立民族学博物館先端民族学研究部

- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| 1 はじめに           | 5 祭とホスピタリティ          |
| 2 イテルメンたちの危機への対応 | 6 イテルメン社会における萌芽的階層分化 |
| 3 パートナーシップの儀礼    | 7 おわりに               |
| 4 婚姻ネットワーク       |                      |

### 1 はじめに

イギリスの考古学者 V. G. チャイルドによって提唱された食物を集める社会と食物を生産する社会との大きな相違を強調するアプローチは (Child 1941), アメリカの新進化主義者たちによってさらに精緻化され (White 1959; Service 1962; Sahlins 1968), 20世紀後半には西側の学術書, 教育書, そして一般書の中に定着していった。しかし同時に, それとは異なる狩猟採集社会の様々な形態どうしの相違点を明らかにしようとするアプローチもやはり西側の研究者たちによって支持されてきた。例えば, L. R. ビンフォードは「フォレジャー」と「コレクター」との区別を提唱し (Binford 1980), J. ウッドバーンや A. テスタードは食料生産と食料消費が直結している社会 (即時享受システム) と両者が切り離されている社会 (時間差享受システム) との区別を主張した (Woodburn 1980; 1982; Testard 1982a; 1982b)。この2つのカテゴリーは近代の西側世界の伝統では, 純粋な (普遍的または漂泊的) 狩猟採集民 (pure hunter-gathers) と複雑な社会を持つ狩猟採集民 (complex hunter-gathers) として定義される。

多くのロシアの民族学者たち, とりわけ理論指向が強い民族学者たちも, 定住的, 半定住的な狩猟採集民たちの社会組織の複雑さを指摘していた。彼らはそれらの社会を, 原初的形態の食料生産経済に依拠する社会と同等であると考え, その中には社会分化が相当進んでいるケースも見られると主張していた (例えば, Shnirelman 1992b: 185)。1980年代には複雑な社会を持つ狩猟採集民と初期農耕民との際立った類似性を指摘する社会人類学者が増え, しかも, その類似性は経済関係や集落形態 (Barnard 1988: 5) のみならず, 親族システム (Barnard 1988), 社会組織 (Spielmann 1986), ジェンダー関係 (Colloer and Rosaldo 1981), 戦争 (Shnirelman 1994a) などの面でも指摘されるようになった。同様に, 考古学者やエスノヒストリー研究者も, 遠い過去か近い過去かを問わず, 複雑な狩猟採集

社会はもはや稀有な現象ではないと主張し始めた(Price and Brown 1985; Shnirelman 1986 a: 126-127; 1989: 401; Shnirelman 1992b: 186-187; 1994b)。

例えば、巨大な、年間を通じて利用されるような集落は、グレート・ベースン(アメリカ合衆国)の河川地帯や湖沼地帯では中期完新世から知られており、その住民は高度に分化した社会組織を持っていた。カリフォルニアでは2000年前の明らかに社会的な分化が進んでいたことを示す巨大な墓地が見つかっている。そこでは既に紀元前2千年紀から1千年紀の間に極めて効率の高い食料採集経済を基盤にして、極めて大きな集落が栄えており、その大きさは後世の隣接する西部の農民たちの集落よりも遥かに大きかった。北アメリカの北西海岸では高度に分化を起こした社会が紀元前1千年紀後半から見られた。南フロリダのカルーサ狩猟採集民の間では16世紀初頭までには、そのあらゆる特徴を持った首長制社会(chiefdom)が発達していた。ペルーの海岸地帯では紀元前3千年紀後半の間に、主に漁撈と海獣狩猟に依拠した複雑な構造を持つ社会が出現していた。

最古とまではいえなくても、複雑な社会を持つ狩猟採集民の中できわめて古い社会の一は西アジアのナトゥフィアン文化に現れている。その年代は更新世末期から完新世初頭にまで遡る。日本でも進化した狩猟採集社会が、農耕が導入されるはるか以前に成立していた。その発展は最近発見された青森県の三内丸山遺跡によく現れており、そこは紀元前3千年紀に遡る時代に35haもの広さを占めていた。ロシア極東地域(アムール地域と沿海地方)でもいくつかの地方で、完新世中期以降の巨大な、年間を通じて使われていた漁撈民の集落が見つかっている。同様に、北ウズベクスタンのアラル海南部でも巨大な漁撈民のコミュニティが紀元前4千年紀から3千年紀にかけての時代に栄えていた。ヨーロッパの森林地帯の高度に効率化された漁撈経済は中石器時代後期にその起源を求めることができるが、そこから新石器時代の間、分化の進んだ社会であることを顕著に表す埋葬施設をとともなう巨大集落が出現した。そして、その想定される進化過程のデータとしては不十分ではあるが、民族誌的にはニューギニア低地に見られるサゴヤシ採集に特化して分化が進んだ社会がしばしば言及される。

はるか以前には、狩猟採集を主とする生業体系をもつ複雑な社会が、ここ数世紀の間に旅行家や民族学者たちに記述される以上に、広く存在していたことは十分に考えられることである。しかし、この最後の千年紀の間に多くの社会が崩壊してしまった。ロシアのチュトカ半島(Arutiunov *et al.* 1982)や北アメリカ北西海岸(Hayden and Ryder 1991)で起きたことはその典型的な事例なのである。

問題とされる社会のほとんどが北方地域か亜熱帯植生の地域に存在したという点は重要である。彼らの生業は実に多彩であった。漁撈と海獣狩猟、漁撈と狩猟と植物採集、野生植物の集中的利用等々のケースを挙げることができる。彼らは非漂泊的であり、高い人口密度と比較的安定した組成を持った巨大な居住集団を形成するという特徴を持っている。そしてその大多数が極めて信頼性が高く、豊かな食料資源を利用しており、それを獲

得し、貯蔵するための洗練された技術を持っている。例えば、様々な設備（やな、わな、柵、貯蔵施設）、移動手段（カヌー、トラヴォイ<sup>1)</sup>、そり）、複雑な狩猟漁撈用具（様々な網や他の漁撈用具、特化した道具類や武器類）、そして食物を調理、準備するための特殊な技術などである。

しかし、自然資源への信頼性はすべてのケースで絶対的ではない。というのは、これらの社会の中には散発的に起きる食料不足に悩むものがあるからである。例えば亜極北の半定住的な漁撈民ではそのような食料不足はよく知られており、そこでは時折飢饉すら起こるのである。それゆえ、マーシャル・サーリンズが提唱した「本来的な豊さ」(Sahlins 1972) という極めて蓋然性が高かった仮説も覆されざるをえないのである。着目すべきは非農耕民社会が楽園にあったということではなく、彼らが特殊な技術的ならびに社会的な手段を発達させ、それによって時折起こる食料不足に打ち勝ってきたという事実である。それは例えば亜極北の漁撈民たちに特徴的に見られる、すなわち、彼らはまず生態的な危機に対処するために技術的、社会的手段を発達させ、次に階層的な社会システムを導入したのである (Donald and Mitchell 1975; Shnirelman 1993; 1994c)。モートン・フリードが初期農耕民と複雑な社会を持つ狩猟採集民とを含む広い意味での階層性社会というカテゴリーを設定したのも決して偶然ではない。余剰生産物の再分配を目的とした特殊な社会的なメカニズムは、問題とする社会の最も顕著な特徴の一つである。

## 2 イテルメンたちの危機への対応

私はこの種の社会システムの特徴を次の4つの側面から説明したい。すなわち、経済的効率、生態的な制約、食料危機、そしてその危機を克服するための社会的な手段である。本稿ではこれらの4つの側面をそれぞれ分析するが、特に第4の側面を強調したい。私の主要なデータはカムチャツカ半島のものである。そこには何世紀にもわたってイテルメンと呼ばれる半定住的な漁撈、海獣狩猟民が住みついていた (Shnirelman 1993; 1994c; 1999)。そして、カムチャツカ半島の北部彼らはコリヤークというトナカイ遊牧民と接触していた (図1)。

伝統的にイテルメンは川の谷間に恒常的な集落を作り、夏の短い期間だけ、数人の生業がよくできる男女が海岸や河口に出かけて、冬の食料を貯え得るために漁撈に精を出す。主に男性が様々な道具や網を使って漁に励み、女性は捕った魚を処理する。それはきわめて重要な仕事で、魚を三枚に下ろして、人が食べるユコラ（干し魚）と犬のえさにするユコラ（頭と尾がついた骨の部分）を作るのである。19世紀末期の統計資料によれば、彼らの経済はきわめて効率的で、数人で100人分の食料を用意するのも決して難しい仕事ではなかったという (Shnirelman 1994: 175-181)。

普通、資源の過剰利用が生態学的な制限要因として挙げられることが多い。しかし、カ

ムチャツカの場合、民族誌的現在（すなわち19世紀から20世紀の変わり目）の時点で見れば、資源の過剰利用はほとんど見られない。住民は必要分よりはるかに多くの魚を利用できたのであり、その点についてはマーシャル・サーリンズがいう通り（Sahlins 1972:52ff）、カムチャツカでは明らかに生産量が資源量を下回っていたのである。

しかし、このことは決して住民たちが食料危機と無縁だったということの意味するものではない。大体この食料危機は純粹に生態学的な要因と半分生態学的で半分技術的な要因の2つの要因によって定期的に起きていた。第1の要因とは漁獲の急激な減少である。それは大体数年の1度の割合で起こるサケの遡上数の変動によって引き起こされる。その定期的な変動は文献にもよく表れていて、魚の種類と環境要因に応じて2年に1度、4年に1度、6年に1度、あるいはもっと長いサイクルで起きる。例えば、1890年代の統計資料から、カムチャツカでは大体5年から7年のサイクルで変動が起きていたことがわかる（図2）

（Shnirelman 1994c: 183）。この資料が意味するものは、どの特定の年をとっても、よ

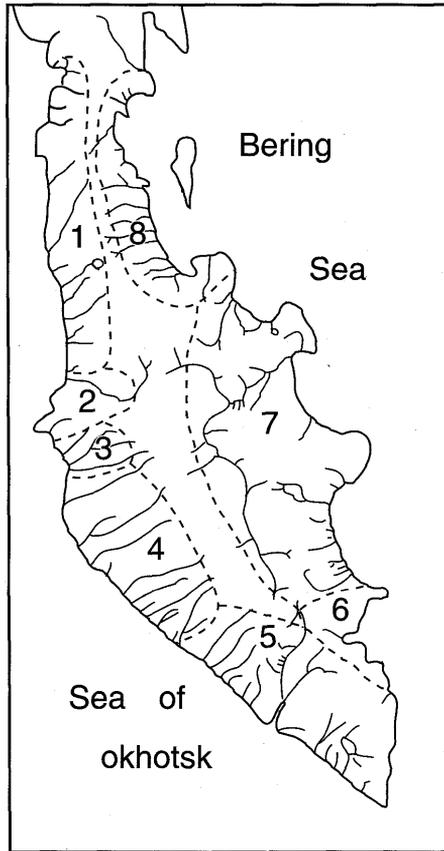


図1 17世紀後期におけるカムチャツカ半島のイテルメンとコリヤークの低位集団の分布状況（Shnirelman 1994c）  
 1：パラナ・コリヤーク，2：チギリ・コリヤーク，3：ハイリュゾヴォ・イテルメン，4：西イテルメン，5：ポリシヤヤ川イテルメン，6：アヴァチャ・イテルメン，7：カムチャダール，8：カラガ・コリヤーク

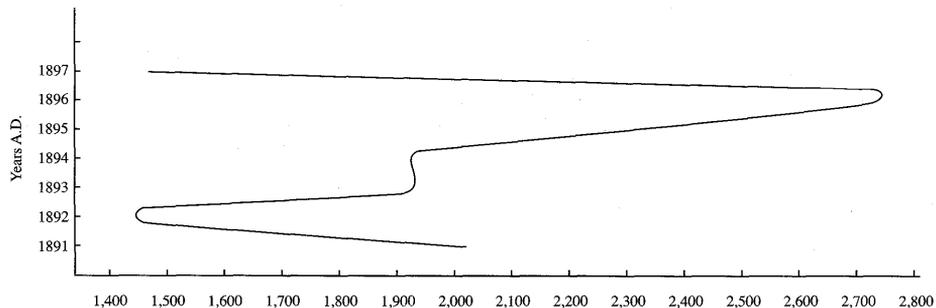


図2 19世紀末期におけるカムチャツカでの漁獲推移（Shnirelman 1994c）

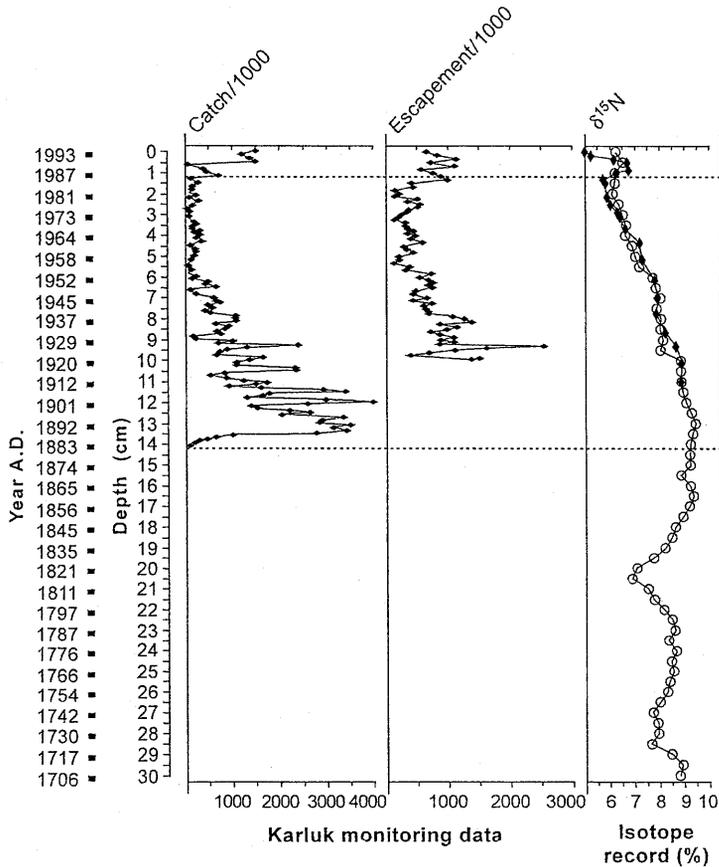


図3 過去300年間のカルルク湖(アラスカ南東部コディアック島)での環境の推移とサケの漁獲状況の変化 (Finney et al. 2000)

り正確にいうならば、どの年の漁獲をとっても、代表的な漁獲を表すことは決してないということである。ここから見るべきものは、変動の振幅の大きさである。もっとドラマティックなのは、世紀に1度の割合で起きるいわゆる「生物学的な振り子現象」で、北方地域全域に特徴的な現象である(図3)。それは世紀末ごとに見られた寒冷期から温暖期への緩やかな移行、あるいは次世紀初頭に見られるその逆の現象に影響されている(Krupnik 1989: 124, diagram 3)。寒冷期には遡河性の魚と海獣類の居住地域が南の方へ、つまり日本近海へ移動してしまうため、カムチャツカやチュコトカでは漁撈で暮らすのが非常に難しくなる。逆に、カムチャツカでは温暖期になると定住的あるいは半定住的漁撈民にとっては住みやすい地域となる<sup>2)</sup>。さらに、1890年代は、細かな変動はみられるものの、全体的に亜極北でのサケ科魚類の漁獲という面では最も恵まれた時期であった(気候変動とサケ科魚類の豊富さとの因果関係については、Finney et al. (2000: 797, fig. 3)を参照)。

もう一つの食料危機の要因は早すぎる雨や蠅の害によって引き起こされる干し魚の損

失である。人々がそれらに十分に注意を払わないと、天日干しにされている魚が腐り始め、コミュニティ全体が飢饉の危機にさらされてしまうのである。それは決して抽象的な脅威などではなく、そのためにロシア極東地方の漁撈コミュニティでは1世紀の間に何回かの飢饉に遭遇した。(Shnirelman 1994c: 182-184)。

同時に、19世紀後半にカムチャツカで得られた資料は、不漁の年でも、同じ人口規模あるいは異なる人口規模のコミュニティの間で漁獲高にきわめて大きな差があることを物語っている。例えば、1892年の不漁はペンジナ湾のイテルメンには全く影響がなかった。それどころか、逆に前の年よりも漁獲が増えているのである。そのような状況下では住民の生存と活力は、利用可能な食料の効果的な再分配機構を持つかどうかにかかってくる。ロシア人との接触以前あるいは接触初期の頃の伝統的なイテルメンのコミュニティは、そのような機構を運営するための中央集権化された権威というものを持っていなかった (Al'kor and Drezen 1935: 31; Steller 1927: 22; Krasheninnikov 1949: 366, 406)。その代わりに、彼らは畑作農耕民の間でよく知られているような互恵的な個人間のパートナーシップや共同体の祭りといったものを通して再分配を実行してきた。

### 3 パートナーシップの儀礼

パートナーシップを確立するための習慣は非常に面白いもので、ここで詳しく記述するのに十分値する。クラージェニンニコフとステラーによれば、それは次のようにして結成された (Krasheninnikov 1949: 432, 433, 702; Steller 1927: 57-58)。

ある人がパートナーを作りたい時、その人は友だちにしたい人を自分の家に招き、大量の料理を用意して自分の家の中を強烈に暑くしておく。主人と客は家の中では服を脱ぐ。主人は際限なく客を歓待し、炉の中の真っ赤に熱せられた石に水をかけて室内の温度をどんどん上げる。客の方は出された料理を全て食べようと努め、強烈な暑さも我慢しなければならぬ。ロシアの民族学者 S. P. クラージェニンニコフの記すところによれば、客は食べ過ぎて何回も嘔吐する。しかし、それでもすべての料理を平らげようと努めるのである。その間主人の方は何も食べないが、家の中の堪え難い暑さを逃れて、外で休みをとることができる。このような歓待は客が降参して慈悲を乞い、主人に衣類や犬ぞりのチームなど自分の持ち物をすべてを贈ると言い出すまで続けられる。主人はそうして初めて客を歓待攻めから解放してやり、贈り物のお返しにぼろぼろの衣服と優秀でない犬ぞりのチームをプレゼントする。もし主人が寛大な人ならば、それから3日間客は食べ物を目にしないですむ。そうしてこの2人は友情の絆で結ばれるのである。その後、主客逆転し、以前の客が今度はもとの主人を客として待つことになる。もちろん彼が受けたのと同じ歓待を用意してである。もしその友人が長い間訪問を遅らせるようならば、彼はもう1度その友人宅を訪問して、自分が受けた歓待と同じものを受けなければならないことを行為でアピ

ールする。それを行わないことは大きな罪であり、本当の恥辱を与えたことになる。そのような人物は社会から追放されるのが通例である。

クラシェニンニコフはこの慣習を通じて人は自分の必要とするものを手に入れることができるのだと主張し、近代の研究者たちはこの慣習を、彼にしたがって、「友人関係の確立を通じた一種の原始的な交換」として扱ってきた (Krashninnikov 1949: 432, note 1)。しかし、広く他のデータと比較してみると、問題の慣習は、失敗した時や本当の危機に対処するための安全保障となる社会的なネットワークを広げる試みであるという方が適切である。実際この慣習は様々な人々の間で見られる疑似兄弟関係の締結儀礼によく似ている。アナトリー M. ハザーノフは、この種の儀礼は社会階層が形成されつつある時代に、かつての親族的な絆が弱まり、個人の利益や権利を保障する他のシステムがまだ確立していない場合によく発達すると述べている (Khazanov 1972; 1975: 107-111)。彼がいうには、新しくできる社会的な絆はかつての血縁関係と同じように見られ、友人となる儀礼には二人の間に親族的な (あるいはもっと正確には疑似親族的な) 絆を作ることが必要となるのである。時には、スキタイの人々で見られたように、友人となる二人の血を混ぜ合わせる儀礼が必要となることもある。しかし多くの社会では、疑似親族関係を結ぶのに共食儀礼を行うことで済ませている。というのは、食べ物を分け合うことによって同じ身体とアイデンティティを共有することができるからである (Strathern 1973: 28-29; Butinov 1980)。おそらく、これがカムチャツカのイテルメンたちが友人関係を築く際に行う寛大な待遇の意味するところではないだろうか。

さらに、この問題の慣習には北アメリカ北西海岸の先住民たちの儀礼と共通する側面が見られる。既に前に述べたように、イテルメンの慣習には2重の浄めがなされる。すなわち、嘔吐することは身体の内部を浄めることであり、汗をかき、それを草の束で拭うことは身体の外を浄めることである。北西海岸先住民の信仰によれば、この2つの行為は諸霊を鎮め、人生の成功と繁栄をもたらしてくれるという (Drucker 1965: 85-86)。イテルメンたちが火を強力な浄化作用を持つものとして扱うことはよく知られている。彼らは火を崇拜し、大きな年中行事では必ず火に供物を捧げる (Steller 1927: 68; Krasheninnikov 1949: 417-424)。いいかえれば、この慣習を通じて人はあらゆる異物、あらゆる悪を拭い去って自らを浄化し、新しい友人に対して心を開くわけである。それは相互に歓待と贈り物の交換を繰り返すポトラッチと共通する (Drucker 1965: 55-56)。衣服を含む個人の持ち物を交換することは、非常に重要な意味を持っている。というのは、カムチャツカの住民の間では衣服はその持ち主と同一化され、そのイメージを保持すると信じられているからである。したがって、そのような浄化と交換の儀礼によって新しい友人の間にパートナーシップが生じ、いざという時に最も信頼できる相手として助けを求められることができるようになるのである。

このパートナーシップは同じ文化的な枠組みの中でのみ形成されるものではなく、異な

る生活様式を持つ者どうしの間でも形成される。カムチャツカ半島ではコミュニティ間、あるいは異文化間の分業というものが普通に行われており、半島全体を覆うような広域の相互交流が見られた。初期の探検家たち (Steller 1927: 24; Krasheninnikov 1949: 369) はしばしばイテルメンどうしの交換とともに、イテルメンと隣接するコリヤークのトナカイ牧民との交換を記録している。彼らの観察によれば、人々は自らで有り余っているものを、不足しているものと交換していた。例えば、イテルメンたちはコリヤークたちに高級毛皮、犬の毛皮、乾燥した薬草などを提供し、代わりにトナカイ製品 (毛皮や毛皮の衣服など) を得ていた。さらに、海岸地帯の住民は春になるとトナカイコリヤークたちの新鮮なトナカイの肉をほしがった。というのは、その季節には彼らが貯えていた魚も肉も底をつくからである。その代わりに海岸地帯の住民はトナカイ牧民たちに海獣の脂肪や毛皮を提供した。それらはトナカイ牧民たちにとっては価値が高いものだったからである (Bilibin 1934: 10, 18-22)。もちろんそれは交易というよりは贈り物の交換であり、初期の探検家たちはこの交換が「朋友関係」や「友人関係の確立」のために行われていたことを強調している。

筆者による1992年8月の調査では、海岸地帯のイテルメンや海岸コリヤークとトナカイコリヤークとの間の伝統的な交換関係は1950年代まで続いていたことが明らかにされている (Shnirelman 1992c; 1999)。トナカイコリヤークたちは冬に海岸に出てきて、地元の特定のパートナー (コリヤーク語で「トゥンメ」という) と交換を行っていた。パートナーは大体同じ歳どうし者のことが多かったという。海岸の人々はトナカイ牧民に海獣の肉や海獣の皮で作ったベルトを提供し、そのお返しにトナカイの枝肉を何本か受け取っていた。ピリーピンが述べていたように、この種の交換は経済的に等価ではなかったが、パートナーの間では決して不平不満が起きることはなかったという (Bilibin 1934: 19)。地元の人々にとって重要だったのは交換という行為そのものではなく、社会関係の構築なのであり、それが突発的に襲う飢餓から人々を救うことができたのである。

#### 4 婚姻ネットワーク

初期の探検家たちによって報告された「朋友関係」の基礎には何があったのだろうか。既に述べたパートナーシップ以外に、婚姻関係も重要な役割を果たしている。筆者の調査に協力してくれたコリヤークのインフォーマントによれば、カムチャツカの先住民たちは近い血縁関係にある者どうしの婚姻関係の連続を否定的に捉えている。したがって、彼らは遠方の村に結婚相手を求めることを好み、異なる民族あるいは文化集団に求めることも稀ではない。例えば、トナカイコリヤーク (チャウチュウエン) はチュクチやエヴェン、海岸地帯の住民 (ヌイミラン) との結婚を大いに歓迎している。彼らは異民族間の結婚で生まれた子孫はより健康的であると考えており、しばしば自分たちのトナカイ飼育の経験を引き合いに出す。すなわち、野生トナカイとの交配が飼育トナカイの血を「浄化」し、

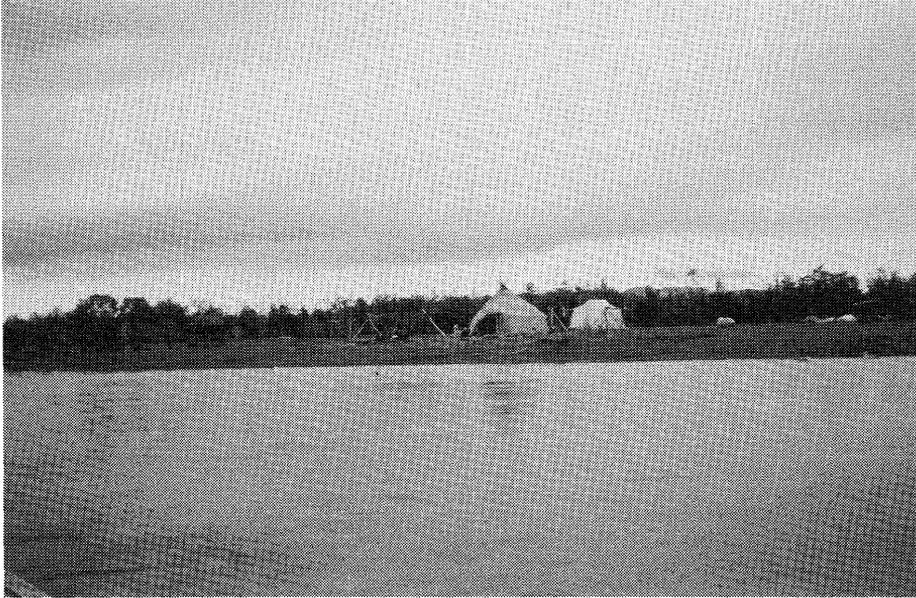


写真1 エヴェンの夏のキャンプ（カムチャツカ半島にて）



写真2 エヴェンの夏のテント（カムチャツカ半島にて）



写真3 エヴェンの網漁（カムチャツカ半島にて）



写真4 捕った魚を岸に運ぶ  
（エヴェン，カムチャツカ半島にて）



写真5 大漁！  
（エヴェン，カムチャツカ半島にて）



写真6 魚の処理（エヴェン，カムチャツカ半島にて）



写真7 干し魚の準備（エヴェン，カムチャツカ半島にて）



写真8 魚を干す（エヴェン，カムチャツカ半島にて）



写真9 犬用の干し魚を作る（エヴェン，カムチャツカ半島にて）



写真10 イテルメンの倉庫（カムチャツカ半島にて）



写真11 トナカイの毛皮（エヴェン、カムチャツカ半島にて）

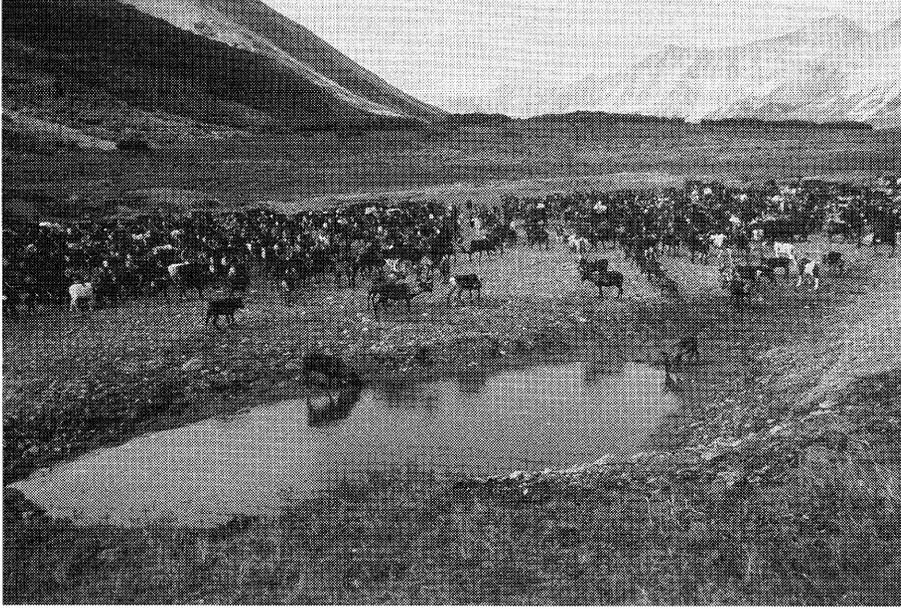


写真12 バラナ川上流の夏のトナカイ放牧地（コリヤーク、カムチャツカ半島にて）

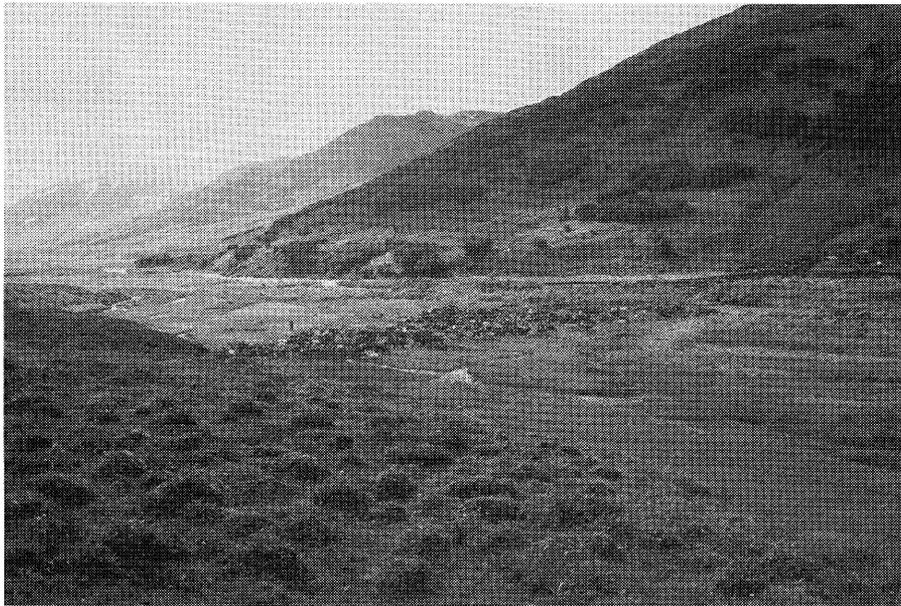


写真13 谷を下ってトナカイの群を追い立てる（コリヤーク、カムチャツカ半島にて）

飼育に役立つというのである。

現在コリヤークという民族はロシアの民族学者によって2つの「民族的」なグループに分類されている。すなわち、チャウチュウエン（トナカイ遊牧民）とヌイミラン（海岸定住民）である。しかし、チャウチュウエン自身は独自の民族観を持っている。彼らは、チャウチュウエンは豊かなトナカイ飼育民であり、本当のコリヤークはトナカイ牧民であるべきだと考えている。そしてヌイミランを「異なる人々」と考えている。彼らが全く異なる生活様式を持っているからである。チャウチュウエンは自分の方言に誇りを持っていて、学校で子供たちに異なる方言が教えられるのを嫌う。彼らはヌイミランよりも先にこの世に生まれたと信じている。というのは、彼らの伝説によれば、人間とトナカイはその創造時より互いに近い

関係にあったと伝えられているからである。この伝説ゆえに、トナカイコリヤークは海岸地帯の住民に対してある優越感を抱いている。クラージェニンニコフが記しているように（Krashennikov 1949: 450; Bilibin 1934: 20）、トナカイコリヤークは海岸の住民を「召し使い」と呼び、滋養のある食べ物をトナカイ牧民たちに頼っている以上、海岸の住民はそれを我慢しなければならないのだと考えている。

しかし、筆者のインフォーマントによれば、定住漁撈民たち、つまりイテルメンたちは自分たちの方がトナカイコリヤークよりも文化的にも社会関係の面でもはるかに進んでいると考えている。面白いことに、言語分類に基づいた現在の民族政策的民族分類、すなわちコリヤークとイテルメンとの分類とは異なり、伝統的な民俗分類は生活様式に基づいており、かつてトナカイコリヤーク（チャウチュウエン）はイテルメンと海岸コリヤークを一緒にして自分たちとは区別していた。このことを最初に指摘したのはステラーで（Steller 1927: 13）、彼はコリヤークがイテルメンを「ヌイミラン」と呼んでいると述べている。クラージェニンニコフも海岸コリヤークとイテルメンが文化と生活様式の点で類似していることを主張している（Krashennikov 1949: 448-449）。その一方で、彼はまたトナカイチュクチとトナカイコリヤークを同一視している（Krashennikov 1949: 449）。つまり、彼のカムチャツカの住民に対する分類は、言語と自己認識を柱とする民族分類よりも、生活様式と文化の相違を強調する民俗分類の方に幾分近いと言えるだろう。

実際、海外地帯の住民はある文化的側面のみならず、その生活様式、言語（イテルメン）、



写真14 伝統的な衣装を身につけたコリヤークの女性（カムチャツカ半島にて）

方言（ヌイミラン）などもトナカイ牧民とは異なっていた。現在まで保持されている主要な相違点の一つは埋葬儀礼である。18世紀中期までにはキリスト教に改宗していた海岸地帯の住民は、棺に遺体を納めて地下に埋葬する。しかし、トナカイコリヤークやトナカイチュクチの間では、クラシェニンニコフが初めて紹介したような火葬（Krasheninnikov 1949: 459, 735）が現在でもなお行われている。このような儀礼の意味を説明する時、コリヤークたちは、人の魂は火葬によって自由に飛び立つのであり、土葬にしてしまうと蛆虫たちに死体を食べられて苦しまなければならないというのである。人々はいまだに自らの埋葬方法にこだわっており、夫婦でもその出身グループが異なれば（例えばチャウチュウエンとヌイミランの場合）、埋葬方法も当然異なってくるのである。

この地域の慣習では、人は自らの属する民族や地域の文化よりも、むしろ居住地のコミュニティの文化に忠実であることが要求される。例えば、結婚したコリヤークの女性が両親に会うために自分が生まれた村に里帰りすると、彼女は古い娘時代の服に着替えなければならない。彼女はそれによって「我々の仲間」に戻れるのであり、そうしなければ「異邦人」のままでいなければならないのである。筆者のインフォーマントの話では、娘時代の服に着替えている間は若返って、以前に戻ったような気がするという。それと同様に、夫の村では全く異なる振る舞い方をしなければならない。というのは彼女はコリヤークの出身だが、夫はエヴェンの出身だからである。かつては同様の衣服と人との同一化がイテルメンの間でも見られた。ステラーによれば、死者の着ていた服はただちに捨てなければならない（Steller 1927: 56）。もし他の誰かがそれを着れば、その人が死ぬことになるからである。

ここ数十年の間でロシア連邦とその周辺諸国の大きな民族集団の間で顕著になってきた民族内婚の傾向とは対照的に、北方の、とりわけカムチャツカの少数民族の間での民族間結婚はいまだに広く行われている。その最大の理由は、自らの安全保障となりうる社会的ネットワーク、つまりは親族ネットワークを広げようとすることにあり、「血の浄化」にあるわけではない（ただし、人々はこの隠喩によって説明しようとする）。

## 5 祭とホスピタリティ

ホスピタリティというものは伝統社会における困難を乗り切るための方法として世界的に共通であるが、イテルメンの場合もその例外ではない。それは彼らの間で広く見られ、つい最近までその重要性が維持されてきた。彼らの場合、特筆すべきは、母方の親族か姻族をまず訪れていたという点である。ホスピタリティは特に結婚式やクマなどの大形獣の捕獲といった重要な出来事を祝うために1つのコミュニティが催す祭りに表れる（Steller 1927: 28, 58, 60; Krasheninnikov 1949: 427）。したがって、冬の間中イテルメンのコミュニティでは互いに訪問しあい、主人の歓待ぶりは振舞われた食べ物の量で評価される。ク

ラーシェニンニコフが述べているが、主人は客たちが何回も嘔吐するほどの量の食べ物を振舞う (Krashennikov 1949: 368, 427)。そして、ステラーは1740年代の状況を述べる中で、イテルメンたちが当時の食料不足に不満を募らせ、次のようにいっていたと述べている。「幸せな時代は過ぎ去ってしまった。あのころは1日に3回も4回も吐いたものだが、今では吐くということ事体がほとんどなくなってしまった」(Steller 1927: 46)。このようなイテルメンに関するデータはベネズエラのヤノマミ、あるいはパプアニューギニア高地のパプアのような多くの焼畑農耕民たちの威信をかけた祝祭の事例にきわめて近い。彼らの祝祭では客を嘔吐させるのが正しいもてなし方なのである。そして、彼らの場合と同様に、イテルメンの祭りや儀式も社会的な紐帯を強固にするために、とりわけ婚姻関係の確立、友だち選び、貴重な情報の交換、贈り物交換を通した必要な物資の入手といったことを行うために重要なのである (Shnirelman 1986a: 404-405)。

この祭りの進め方は、その地域の慣習に初めて接したヨーロッパ人にとってはまことに奇妙なものに見えたのかもしれない。イテルメンたちがその客に振舞うごちそうの一つが発酵させた魚の頭だった。イテルメンたちの魚の処理方法には2つある。一つは乾燥で、もう一つが発酵である (Shnirelman 1944c)。魚を発酵させる穴は、人間用のものと犬のえさ用のものが区別されていた。現在では祭用の小さな桶の中で魚の頭を卵や白子とともに発酵させている。イテルメンだけでなくロシア極東地域の他の先住民たちも発酵させた魚の頭を最上の珍味だと考えている。対照的にヨーロッパ人たちはこの種の食べ物に嫌悪感を覚える。彼らは腐ったような堪え難い悪臭に閉口する。その臭いはかなり遠方からでもわかり、それで先住民の村の大体の位置を当てることすらできるほどであった (Al'kor and Drezen 1935: 31; Steller 1927: 38; Krashennikov 1949: 393, 394; Ditmar 1901: 325)。現在のイテルメンたちはこの発酵した魚の頭に対する嗜好をよそ者たちに語ることを嫌がっており、たとえ語ってくれても恥ずかしそうなそぶりを見せる。しかし、カムチャツカの地元の医師から聞いた話では、発酵食品(ベリー類、野草、発酵魚など)は先住民たちの貴重なビタミン源となっているという。ビタミン類は、今でもなお高緯度地方では蔓延し、拡大さえしている肺結核などの地域特有の病気に対する抵抗力をつけるに必須である。特筆すべきことに、この魚の発酵食品はロシア北方の先住民以外ではアイスランドでもよく知られている。つまり、様々な人が北の厳しい自然環境に適応するために最適な食物を独自につくり出してきたのである。さらに付け加えるならば、極東地域に永年暮らししてきた私のロシア人のインフォーマントによれば、発酵魚も慣れれば普通の魚より柔らかくて、美味しいと思うようになるのだという。

他の焼畑農耕民たちと同様に、イテルメンの祭も競い合いという側面を持っている。それは、兄弟を契る儀礼に見られるように、個人の間で行われるだけでなく、コミュニティの間でも行われる。後者の例についてはクラージェニンニコフが次のように報告している。「もし誰かが自分の客をもてなすのに、その客がかつてしたよりも食べ物が少ないと

すると、それは大変な侮辱とみなされ、侮辱を与えたコミュニティを皆殺しにしてしまうほどの報復がなされることになる」(Krasheninnikov 1949: 402)。この記述に見られるのは、階層制社会に共通の特徴であり、それはかつて焼畑農耕民たちの調査で「食べ物をめぐる戦い」(Young 1971)と呼ばれたものである。しかし、現在では競争的祝祭の制度というものが複雑な狩猟採集社会でもよく知られるようになっている。そのような狩猟採集民たちはこの制度を通じて「ありあまる資源を需要が高く、より不足しがちな別のものやサービスに転換する」(Hayden 1994: 232)のである。以下に述べるように、イテルメンもそのケースにあてはまるのであり、彼らはこの制度を経済的、社会的相互依存関係の基礎としていたのである。

## 6 イテルメン社会における萌芽的階層分化

イテルメンたちの中には富を表す資源や象徴が少ないために、彼らは食べ物の量でもって客たちに強い印象を与えようとする。そのために初期の探検家たちは、吐くまで食べ続けるという彼らの食べることに對する極端な態度を強調することになってしまった。また、威信経済から生じる社会的な欲求は時には生業経済と整合しなかった。彼らはしばしば自分の食料資源からはまかなえきれないほどの量の食べ物を客に提供していたのである。このことはまた食料資源が豊富な時ですら飢餓を招くようなことを引き起こし、暖かくなるまで木の皮で食い繋いだり、トナカイコリヤークのパートナーの援助に依存するなどの方法でやっと生き延びるようなことにもなった(広い意味での威信経済については(Shnirelman 1992a: 36)を参照)。イテルメンたちが示す「軽卒さ」や「浪費癖」、そして冬の貯えを客をもてなすためにいとも簡単に使い尽くしてしまう「あさはかさ」は、最初のヨーロッパ人探検家たちには驚きでしかなかったが(Steller 1927: 45-46; Lesseps 1801: 92-93)、実はそれらは威信経済が発達しつつあり、内部で階層分化が始まった社会に共通に見られる特徴だったのである。

残念ながら、イテルメンに関してはその過程を研究するためのデータが非常に少なく、断片的でしかない。しかし、それでも17世紀後半から18世紀にかけての時代におけるイテルメンたちに見られた社会分化の萌芽を十分見て取ることができる。初期の探検家たちは皆、当時イテルメンの各地域コミュニティにはインフォーマルな指導者がいて、彼らはフォーマルな秩序ではなく、個人的な権威と信念によって人々に強い影響力を行使することができたということを報告している。ロシア人たちは彼らを「最良の異邦人」(Al'kor and Drezen 1935: 34)と呼んだが、ある意味ではニューギニアの「ビッグマン」にたとえられるのかもしれない。指導力を発揮するのに必要な資質について語るのは難しいが、初期の記録では老人たち(例えば50歳以上の人)が大変敬われ、コミュニティの中では権威を持っていたことが知られている。彼らは公的な、あるいは法的な意志決定の場で中心的な役

割を果たしていた。また、戦争となると勇敢な戦士が強力な指導力を発揮した (Steller 1927: 22, 70; Krasheninnikov 1949: 366, 699; Shnirelman 1999)。

おそらく富も指導者になるための重要な資質であっただろう。富は妻の人数と犬ぞりチームの数で計られた。クラージェニンニコフがいうには、「裕福だといわれる人とは、よい妻を持ち、よい犬を持ち、健康で身なりのよい人物」であった (Krasheninnikov 1949: 692, 708)。そのためにイテルメンたちは時には妻や犬を略奪しあい、それがまた殺しあいにまで発展してしまっていたのである。裕福な人々はイテルメンたちの間で尊敬された (Al' kor and Drezen 1935: 31)。彼らの間で見られた萌芽的なリーダーシップの発達形態は、多くの焼畑農耕民たちの間で知られているものによく似ているのである (Shnirelman 1986b; 1990)。

コミュニティ間でしばしば戦争が起きるのは、社会の階層化が始まった時期における共通の様相である (Fried 1961; Shnirelman 1986b: 405-407; 1994a)。初期の探検家たちは口をそろえてイテルメンたちの間ではコミュニティ間の戦争が珍しくなかったことを述べている。彼らは戦争のやり方をきちんと知っており、特化した武器や防具、戦争指導者、そして原初的な要塞の作り方まで知っていた (Al'kor and Drezen 1935: 27, 32; Steller 1927: 22, 23, 27; Krasheninnikov 1949: 402-406)。彼らはまた敵の中から「高貴な人」を捕らえ、拷問して死に至らしめることすら行っていた (Krasheninnikov 1949: 705)。それは一般的に社会分化初期の段階で共通に見られる行為である。このコミュニティ間戦争の目的の一つはまた重労働を課したり妾とするための捕虜を捕らえること、あるいは食料を略奪することにもあった (Steller 1927: 22; Krasheninnikov 1949: 402, 692)。したがって、先に触れた互酬制と競争の祝祭の他にも、このコミュニティ間戦争もまたもう一つの (より過酷だが) 食料再分配のための社会的なメカニズムだったわけである。

イテルメン語には「カルアド」という特別な言葉がある。これは伝統的に召し使いを意味する言葉として使われてきたが、もともとは戦争の捕虜を意味していた (Krasheninnikov 1949: 698)。このことは、イテルメンの間には互酬制と競争の祝祭とともに、コミュニティ間の戦争もともなう階層化した社会が既にロシア人との接触以前から存在していたことを意味する。ただし、そのような社会が18世紀初期に最盛期を迎えるのは (Okun' 1935: 7-10)、ロシア人の侵入によって刺激されたからであることも事実である。クラージェニンニコフは依存関係を生み出す原因は、飢餓の時の食料援助にあるといい、次のように述べている。「我々が来る以前には、飢餓の時に人を助けたものは、その助けた人を奴隷として扱うことができる」 (Krasheninnikov 1949: 701)。明らかにこの時には互酬制ともパートナーシップとも異なる社会原理が働いている。しかし、残念ながら、その詳細については初期の探検家たちの記録には残されていない。

## 7 おわりに

いずれにせよ、十分とはいえないが、今使える資料からだけでもイテルメンの社会が経済的、社会的、そして人口的に初期農耕社会と極めて類似していると結論付けることは十分可能である。彼らの経済基盤はきわめて強固で、それは100人から200人規模の比較的大きな定住コミュニティを維持することができ、威信経済と萌芽的な社会分化を促進した。いいかえれば、彼らの社会は他の優れた狩猟漁撈採集民たちに対して使われる、いわゆる複雑な社会と呼ぶべきものに含まれるべきなのであって、単なる伝統的な食料生産社会ではない。その活力は優れた生産技術とよくできた食料資源の再分配システムにあるのであって、単なる食料資源の豊かさにあるわけではない。彼らは定期的に起こる環境変動の中を生き抜いてきたが、それは彼らの社会の発展を阻害したのではなく、逆に威信経済と社会の成層化を促進したのである。

## 付 記

本論文の原文は英語であり、翻訳は編者が行った。

## 註

- 1) 2本の棒を棒で固定して動物に引かせる運搬用具。北アメリカの平原地帯の先住民たちが使用していたという。
- 2) 「生物学的な振り子現象」とそのロシア東北地域への適用に関しては Krupnik (1989: 119-145) を参照のこと。また、より広いコンテキストでの説明に関しては Shnirelman (1992a: 29-30) を参照。

## 文 献

- Al'kor Ya. P. and A. K. Drezen (eds.) (Алькор, Я. П. и А. К. Дрезен ред.)  
1935 *Колониальная политика царизма на Камчатке и Чукотке в XVIII веке*. Ленинград: Институт Народов Севера.
- Artjunov, S. A., I. I. Krupnik and M. A. Chesnov (Артюнов, С. А., И. И. Крупник и М. А. Чеснов.)  
1982 *Китвая аллея*. Москва: Наука.
- Barnard, A.  
1988 Property, Power and Ideology in Hunter-Gathering Societies: An Introduction. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers 2: Property, Power and Ideology*, pp.4-31. Oxford: Berg.

- Bilibin, Kh. (Билибин, Х.)  
1934 *Обмен у коряков*. Ленинград: Институт Народов Севера.
- Binford, L. R.  
1980 Willow Smoke and Dogs' tails: Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archeological Site Formation. *American Antiquity* 45(1), 4-20.
- Ditmar, K. von (Дитмар, К.)  
1901 *Поездки и пребывание в Камчатке в 1851-1855 гг.* Part 1. Санкт Петербург: Императорская Академия Наука.
- Chagnon, N.  
1968 The Feast. *Natural History* 77(4), 34-41.
- Child, V. G.  
1941 *Man Makes Himself*. London: Watts.
- Collier, J. F. and M. Z. Rosaldo  
1981 Politics and Gender in Simple Societies. In S. B. Ortner and H. Whitehead (eds.) *Sexual Meanings: the Cultural Construction of Gender and Sexuality*, pp.275-329. Cambridge: Cambridge University Press.
- Butinov, N. A. (Бутинов, Н. А.)  
1980 Общино-родовой строй мотыжных земледельцев (по материалам Новой Гвинеи и Северо-Западной Меланезии). В кн.: Н. А. Бутинов и А. М. Решетов (ред.) *Ранние земледельцы*, стр. 110-143. Ленинград: Наука, Ленин-градское отделение.
- Donald, L. and D. H. Mitchell  
1975 Some Correlates of Local Group Rank Among the Southern Kwakiutl. *Ethnology* 14(49), 325-346.
- Drucker, P.  
1965 *Cultures of the North Pacific Coast*. San Francisco: Chandler Publications in Anthropology and Sociology.
- Finney, B. P. et al.  
2000 Impacts of Climatic Change and Fishing on Pacific Salmon Abundance over the Past 300 years. *Science* 290(5492), 795-799.
- Fried, M. H.  
1961 Warfare, Military Organization and the Evolution of Society. *Anthropologica* 3(2), 134-147.  
1967 *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*. New York: Random House.
- Hayden, B.  
1994 Competition, Labor, and Complex Hunter-Gatherers. In E. S. Burch and L. J. Ellanna (eds.) *Key Issues in Hunter-Gatherer Research*, pp.223-239. Providence: Berg.
- Hayden, B, and J. M. Ryder  
1991 Prehistoric Cultural Collapse in the Lillooet Area. *American Antiquity* 56, 50-65.
- Khazanov, A. M. (Хазанов, А. М.)  
1972 Обычай побратимства у скифов. *Советская археология* 172(2), 68-75.  
1975 *Социальная организация скифов*, Москва: Наука.
- Krashennnikov, S. P. (Крашенинников, С. П.)

- 1949 *Описание земли Камчатки*, Москва и Ленинград: Главсевморпуть.
- Krupnik, I. I. (Крупник, И. И.)
- 1989 *Арктическая этноэкология*, Москва: Наука.
- Okun', S. V. (Окунь, С. В.)
- 1935 Вступительная статья. В кн.: Ю. П. Алькор и А. К. Дрезен (ред.) *Колониальная политика царизма на Камчатке и Чукотке в XVIII веке*, стр. 3-22. Ленинград: Институт Народов Севера.
- Price, T. D. and J. Brown (eds.)
- 1985 *Prehistoric Hunter-Gatherers: The Emergence of Cultural Complexity*, New York: Academic Press.
- Reay, M.
- 1959 *The Kuma: Freedom and Conformity in the New Guinea Highlands*, Carlton: Melbourne University Press.
- Sahlins, M. D.
- 1968 *Tribesmen*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- 1972 *Stone Age Economics*, Chicago: Aldine-Atherton.
- Service, E. R.
- 1962 *Primitive Social Organization: an Evolutionary Perspective*, New York: Random House.
- Shnirelman, V. A. (Шнирельман, В. А.) 11, 182-187.
- 1983 Собиратели саго. *Вопросы истории*
- 1986a Неолитическая революция и неравномерность исторического развития. В кн.: Ю. К. Плетников (ред.) *Проблемы переходного периода и переходных общественных отношений*, стр. 119-134. Москва: Институт философии.
- 1986b Познепервобытная община земледельцев-скотоводов и высших охотников, рыболовов и собирателей. В кн.: Ю. В. Бромлей (ред.) *История первобытного общества: эпоха первобытной родовой общины*, стр. 236-426. Москва: Наука.
- 1989 *Возникновение производящего хозяйства*, Москва: Наука.
- 1990 Class and Social Differentiation in Oceania. In J. Siikala (ed.) *Culture and History in the Pacific*, pp.125-138. Helsinki: The Finnish anthropological Society.
- 1992a Crises and Economic Dynamics in Traditional Societies. *Journal of Anthropological Archaeology* 11, 25-46.
- 1992b Complex Hunter-Gatherers: Exception or Common Phenomena? *Dialectical Anthropology* 17, 183-196.
- 1992c Field notes of the Ethnological Research in Kamchatka in August 1992.
- 1993 Рыболовы Камчатки: экономический потенциал и особенности социальных отношений. В кн.: В. А. Попов (ред.) *Ранние формы социальной стратификации*, стр. 98-121. Москва: Наука.
- 1994a *У истоков войны и мира*, Москва: Институт этнолоии и антропологии.
- 1994b Farming or Fishing? On the Unevenness of Socio-Economic Development in Neolithic times. In *6 Congreso Hispano-Ruso de Historia*, pp.39-54. Madrid: Fundacion Cultural Banesto.
- 1994c Cherchez le Chien: Perspectives on the Economy of the Traditional Fishing-Oriented People of Kamchatka. In E. S. Burch and L. J. Ellanna (eds.) *Key Issues in Hunter-*

- Gatherer Research*, pp.169-188. Providence: Berg.
- 1999 The Item'i. In R. B. Lee and R. H. Daly (eds.) *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*, pp.147-151. Cambridge: Cambridge University Press.
- Spielmann, K. A.
- 1986 Interdependence among Egalitarian Societies. *Journal of Anthropological Archaeology* 5, 279-312.
- Steller, G. W. (Стеллер, Г. В.)
- 1927 *Из Камчатки в Америку: быт и нравы камчадаров в XVIII веке*, Ленинград: П. П. Сойкин.
- Strathern, A. J.
- 1973 Kinship, Descent and Locality: Some New Guinea Examples. In J. R. Goody (ed.) *The Character of Kinship*, pp.21-34. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1977 Melpa, Food-Names as an Expression of Idea on Identity and Substance, *The Journal of the Polynesian Society* 86(4), 503-511.
- Testard, A.
- 1982a *Les Chasseur-Cueilleurs ou l'Origine des Inégalités*, Paris: Société d'Ethnographie.
- 1982b The Significance of Food Storage Among Hunter-Gatherers, *Current Anthropology* 23(5), 523-537.
- White, L. A.
- 1959 *The Evolution of Culture*, New York: McGraw-Hill.
- Woodburn, J.
- 1980 Hunters and Gatherers Today and Reconstruction of the Past. In E. Gellner (ed.), *Soviet and Western anthropology*, pp.95-117. London: Duckworth.
- 1982 Egalitarian Societies. *Man* 17(3), 431-451.
- Young, M. W.
- 1971 *Fighting with Food: Leadership, Values and Social Control in a Massim Society*, Cambridge: Cambridge University Press.

